

京都大学	博士（医科学）	氏 名	森 口 由 佳 子
論文題目	Effects of adolescent substance abuse on executive function, personality, and behavior - An analysis of juvenile reformatory students - (思春期少年の物質乱用による、遂行機能・性格行動への影響について 一少年院における検討一)		
（論文内容の要旨） 【背景】物質依存者は、遂行機能が低下することが神経心理学的に知られている。しかし、先行研究のほとんどは成人を対象としており、物質乱用のリスクが高まる時期とされる思春期を対象にした研究は少ない。さらに、それらの先行研究も海外で行われた大麻やアルコール依存を対象としており、日本で主に乱用されているシンナーに関する研究はない。その上、思春期において、物質依存の基準を満たさない程度の物質乱用者の遂行機能と性格行動に関する一定集団を対象にした報告もない。 【目的】思春期の、物質依存の基準を満たさない者も含む物質乱用者と、物質乱用経験がない者において、遂行機能と性格行動評価の比較を行い、その特徴を検討する。 【方法】対象は、医療少年院に入所している男子少年とした。対象となる少年を、これまで一度も違法薬物を使用したことがない群（Naive 群）、物質依存の基準を満たさない物質乱用群（Substance Abuse; SAb 群）および物質依存の基準を満たす群（Substance Dependence; SDe 群）の 3 群に分けた。全員について、物質乱用期間、乱用物質の種類、田中ビネー知能検査（IQ）、犯罪歴を評価した。乱用物質が複数にわたる者は、Nutt’s harmful score 合計が最も高いものを代表物質とした。遂行機能検査として、Behavioural Assessment of the Dysexecutive Syndrome (BADS)、Wisconsin Card Sorting Test (WCST) および Iowa Gambling Task (IGT) を行った。さらに、性格行動評価として、Barratt Impulsiveness Scale (BIS)、Adolescent Impulsiveness Scale (AIS) および Buss-Perry Aggression Questionnaire (BAQ) を行った。統計解析については、3 群間比較を分散分析および Tukey’s post-hoc test により、また各種臨床評価との相関については Spearman’s Rank Correlation Test を用いて解析した。p < 0.05 を統計学的に有意とした。 【結果】3 群間の年齢、IQ、犯罪歴に有意差は検出されなかった。SAb 群は、シンナー（100%）、大麻（25%）、覚醒剤（12.5%）を、SDe 群は、シンナー（100%）、大麻（28.6%）、覚醒剤（100%）を乱用していた。物質乱用群（SAb 群と SDe 群）において、物質乱用期間が長い者ほど有意に WCST 成績が低下していた。また、IGT の成績が SDe 群は Naive 群に比べて有意に低く、Naive 群よりもリスクを取る傾			

向が高いことが示された。さらに、SDe 群は Naive 群に比し、衝動性、言語的攻撃性、高い無気力感という性格行動上の特徴を認めた。一方、SAb 群では、Naive 群との比較において、各遂行機能検査では有意差は認めなかったものの、無気力感が有意に高いという性格行動上の特徴を認めた。 【結論】物質乱用期間が長い少年ほど、成人の物質乱用者と同様に遂行機能に基づいた合理的なものごとを判断する能力の低下が示唆された。また、思春期の物質依存群の特徴としてリスク取得傾向、衝動性・言語的攻撃性・無気力感の高まりが認められることが明らかになった。さらに、物質依存に至らない物質乱用群の特徴として無気力感の高まりがみられることが本研究により明らかになった。 （論文審査の結果の要旨） 思春期は薬物事犯を含む犯罪のリスクが高まる時期である。薬物事犯の増加に伴い医療少年院では、身体疾患よりも精神疾患の少年の割合が高い。物質依存者の神経心理学的検討でよく報告されるのは遂行機能の低下であるが、これらは成人に関する研究がほとんどであり、思春期の物質乱用者を対象にしたものは少ない上にその関心物質が大麻およびアルコールに限定されている。そこで本研究では、一般社会よりも物質乱用者の割合が高い医療少年院入所の男子少年を対象に遂行機能・性格行動の評価を行った。その結果、物質依存の基準を満たす少年群は、同等の犯罪歴や IQ を有し、過去に違法薬物の使用経験がない少年群に比べ、アイオワギャンブリングタスクの成績が有意に低く、リスクを取る傾向が高いことが示された。また、高い衝動性、言語的攻撃性、および無気力感という性格行動上の特徴を認めた。さらに、物質乱用期間が長い者ほど遂行機能を反映する WCST の成績が有意に低下していた。一方、これまでに違法薬物を使用したことがあるが物質依存の基準は満たさない少年群では、無気力感の高まりという性格行動上の特徴が認められた。これらの結果から、医療従事者は、思春期の物質乱用群でみられる性格行動傾向、すなわち、衝動性、言語的攻撃性、無気力感などを把握した上で、治療や医療的支援を行っていくことが重要であることが示唆される。 以上の研究は、思春期における物質乱用と遂行機能・性格行動の関連性の解明に貢献し、思春期の物質乱用者の治療に寄与するところが多い。 したがって、本論文は博士（医科学）の学位論文として価値あるものと認める。 なお、本学位授与申請者は、平成23年3月1日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。			
要旨公開可能日： 年 月 日 以降			